

自然と生活 資源の生産と消費

4 地下資源の生産・消費に関して、次の文章をもとに、あとの各問いに答えよ。

世界のエネルギー資源は、1960年代を境に石炭から石油を中心とする利用方法へと変化した、いわゆる **A** によって大きく様変わりした。この時期は、わが国にとっても高度経済成長期と重なり、わが国は石炭から石油への移行を経てあらゆる面で生産活動の効率化をはかり、急速に経済発展を遂げていった。

石油は現在でも世界全体のエネルギー資源の中心をなしているが、その産出・埋蔵には地域的な偏在性が見られる。1950年代、石油の偏在性に注目して、欧米のメジャーは多額の資本や人材・技術を油田の開発に投入し、採掘・流通・精製・販売にわたって支配するようになった。そうした中で自国内に油田をもつ中東の産油国は、石油による利益の多くを海外のメジャーにもち去られるという状況を打開するために、① 自国の資源に対する主権を確立し、資源を自国の経済発展につなげようとする考えを強く主張するようになった。そして、1960年に中東の4産油国と南アメリカの(1)の計5か国によってOPEC(石油輸出国機構)を結成した。その後OPECには、他の中東諸国や東南アジアの(2), リビア・アルジェリア・(3)などのアフリカ産油国が加わり、11か国が加盟している(2005年1月現在)。この間、OPECは加盟国における内政問題や、② 周辺地域で起こった紛争などによって石油価格の高騰をもたらし、日本のような輸入依存度の高い国では経済活動が低下するなど、依然として先進国や非産油国に対して大きな影響力を保持している。

他方、**A** によってエネルギー資源の中心的地位を石油にとって代わられた石炭は、③ 地球環境への負荷が大きいなどの理由から、ヨーロッパの先進国ではその産出量・消費量が1990年代以降大幅に減少していった。しかし近年は、その豊富な埋蔵量を見直し、液化・ガス化などの最新技術の導入によって再生をはかる動きも見られる。2000年の需給状況を見ると、石炭の産出量が最も多い国は(4)で、輸入量が最も多い国は(5)である。

問1 空欄(1)～(5)に該当する最も適切な国名を、次の中から選び、符号で答えよ。

- ア. 日本 イ. 韓国 ウ. 中国 エ. フィリピン オ. インドネシア
カ. エジプト キ. 南アフリカ共和国 ク. ケニア ケ. ナイジェリア
コ. ブラジル サ. メキシコ シ. コロンビア ス. ベネズエラ
セ. ロシア ソ. アメリカ合衆国 タ. ブルネイ チ. オーストラリア

問2 空欄 **A** に該当する最も適切な語句を、7字で記せ。

問3 下線部①に関して、このような考え方は何と呼ばれるか。9字で記せ。

